

霧隠軒より折々によせて（第一回）

『この世を濟う生命懸けの覚悟』

この話には桜の季節が相応しい。昔の中国の高僧と、在家の弟子との間の問答である。「和尚様、私は一切を捨てて、此処に参りました。どう導いていただけますか」とすると和尚は「そんなもの捨てよ」と答えた。そこで弟子は「何もかも捨て去って参りましたのに、一体これ以上何を捨てるのですか」と反撥した。和尚はそこで「そうか、それなら持って帰るが良い」と突き放した。この問答「放下著」の言葉と共に禅門では名高いが、余分なものさえ捨て難い現代に、それこそ何もかも捨て去って、きっぱりと一つの道に徹して生きる困難さを示唆している。

さて入学や入社の時季。新人の者はまさに心機一転、新しい世界に飛び込まなくてはならないが、実際はどうであろうか。先般、所用で新幹線に乗った。読み物をし

ていて、何気なく眼を上げると、一人の背の高い青年が通路を歩いてくる。頭に原色の布をきちつと巻いて、ジーパンを穿き、長袖のシャツを着こなし、颯爽としている。

髪が刈り込まれているらしいが、それがまた似合っていた。小柄と眼が合うと、彼はすぐ眼をそらしそれこそ傲然と過ぎていった。すると、その後ろに少年と女性が続いていた。そうして、この女性が通り過ぎた時、一瞬小柄は吾が眼を疑った。この女性は雲水の被る網代笠を両手で持っていたのである。しばらく判断のつかない時間があったが、それでも直ちに事情が呑み込めた。つまり、この青年は明日どこかの修行道場に掛搭（入門）するに違いない。そして、その母親は初行脚の息子が心配で、弟を伴って網代笠を持って付いて来て、たぶん、明朝は道場の山門まで見送るのであろう。しかしながら、今日これに似たような光景は、世間で珍しいことではないよ。うだ。だが、偶々この母子を見て吾門のこと故に、これで良いのかと考えさせられたのだ。実は出家は簡単に言

えば、世間のしがらみを捨て去ることで、放下著そのものである。それは本人も親もそうでなければならぬもの。

昨今その覚悟が失われたのは何故だろう。 恵心僧都は

「往生要集」を著した平安時代の高僧だが、未だ学僧の頃、国家の資格試験に好成績で合格した。そこで喜んで母親に報告し、その賞品等を送り届けたという。しかし、それらは全て直ちに送り返されて来て母の歌が一首添えられていた。《世を濟う聖となると思いしに、世を渡る僧となるぞ悲しき》と。恵心僧都が後世に残る名僧となるのは、この母の言葉に発憤したからである。物事を成すには『生命懸け』と昔から言うが、現代混迷の世で、出家だけではなくあらゆる人達からその覚悟が失われて来たのは何故か。徹底的に個を捨てた人を聖という。それは又全ての人に可能であり、つとめであると恵心僧都の母は教える。その人をこそ覚悟の人と言うべきだろう。それ故に、小柄は我々の心にこの世を濟う思いが少なくなつたことを本当に憂えるのである。